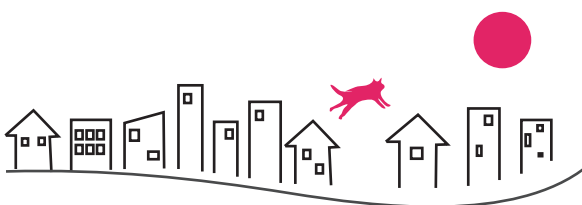


第23回 MASセミナー 港

「2020東京オリンピック・パラリンピック
をきっかけに何ができるのか？」

日時:2016/10/15(土)
講演:14:00~16:00



レガシー（遺産）という言葉は近年、建築界で顕著に聞かれる言葉だ。日本の建築文化は幸いな事に法隆寺や伊勢神宮（20年ごとに立て替えながら）をはじめとして多くの遺産が引き継がれている。ところが日本の近代建築は近年取り壊されている例がすくなくない。そこで2020年の東京オリンピックではどんなものが残せるのかだが、ここでは実態としての建築物ではなく、ときとともに可変可能なスペース（空域）を残したい。メインスタジアムの周辺の街路に沿ったフリースペースをつくり様々な外部空間と人のゆるやかな流れをつくる。あの清水の参道のようなセーヌの河岸にみられるような賑わいがあったとしてもよいのではないか。



今井 均

「ヒューマン・レガシーへの舵切りを」
2020年までに何が出来るかという、ハードのレガシーとしてはほとんど何も残せないだろう。国民がハードとしてのオリンピックに飽きているし、東京一極集中の手助けみたいなことにも嫌気がさしているからだ。で、ソフトとしては、地域の景観の静かな美しさや街路の使いやすさのようなものをグレード・アップすることかもしれない。前者は、植栽・緑化、地域性の強調、など。後者は、自転車走行路の拡張整備やフリー・ライド（乗り捨て）の普及、高齢者のためのバリアー・フリー化、サインの解りやすさや多設化など。都バスなどもっと乗りやすく使いやすいものに。その他、これから気候変動のせいで夏が物凄く暑くなることを考えると、街路シェルターの整備なども意味を持ってくる。この年までに東京に超ド級の天災が起らないことを願って、出来ることをやる必要もある。



大倉 富美雄

日本は平和だが災害のある国であって、これはどんなに社会が成熟しても変わらないから災害への備えは永遠のテーマである。東京が備えるべきは地震への対応である。地震は防げないが「震災」は防げる蓋然性が大きいから、われわれはこの機会にそれをやって見せることで人類文明のロールモデルになることができる。具体的には一般社会の運動として「事前復興」、行政の課題としては道路拡幅よりも電線電柱の全面的な地中化である。



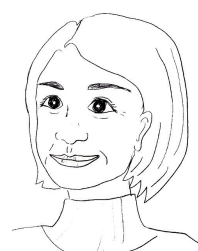
黒木 正郎

オリンピック開催の最大の効用は、世界の国々から人々が東京の街に集うこと・・・この国を知ってもらうことで国を超えた人と人の共感が生まれる事だと私は考えます。モノが溢れるこの街も観光客目線に立った時、未だ未だ足りないモノが残されていると・・・例えば、N.Y.ではストリートの傍らに腰掛けて、疲れた足を休ませながら街並みや街行く人々を眺めることができるチョットした仕掛けが街のそこそこに見かけられますが、東京にはそんな場所が以外に少なかったり、、そんなさり気ない仕掛け創りの提案ができれば良いかも知れません・・・



武田 有左

「民泊とおもてなしの文化について」
オリンピック開催というイベントは、今や国民的な祝祭であるというポジティブな感じは、多くの人から失われているように思う。一方で世界に日本の文化、思想を表現する機会として、またとないチャンスであり、世界から観光客や選手団が訪れる壮大な祭典であるということは間違いない。日本の誇るべき点は何か、次世代のために今やるべきことは何か、日本人が皆で考える絶好の機会だ。空き家を活用した民泊やおもてなし作法など、ハードを作る以外に今の日本から、世界へ向けて発信する方法はある。ソフトから、外向きの日本をつくっていききっかけを考えると良いと思う。



田口 知子



「街中スポーツの発想転換」
東京2020のレガシーとして、街中をスポーツパーク＆ロードに変える。年度末の道路工事はやめて、余った予算は全て街中スポーツに投入。広場の硬い床はスポーツにむかないので剥がし人工芝にする。段差の多い歩道を見直し平らなジョギング＆サイクルレーンを整備する。怪しく薄暗い公園を大衆スポーツパークにすれば街中が明るく変わる。高齢者の太極拳や子供達のフットサルが街を明るくする。身近なスポーツで国を変えよう。



宮田 多津夫

「熟成の社会・減築の視点で想う」
1964年の東京オリンピックは、戦後日本が、がむしゃらに頑張って創りあげた軌跡ですが、急速すぎたことから残った問題も多々あるのは周知のことです。あれから50年以上を経て熟成してきた社会の今、先達に敬意を払いつつも減築の視点で、風通しをよくするチャンスが、この2020年で与えられたのだと感じています。たとえ小さな工夫でも空と風の復権にどのようなことができるかを考えてみたいと思います。



村上 晶子

「ハードと共にソフトにおける
バリアフリーの街を作ろう！」
車椅子の方や高齢者が困る段差や階段を解消し、誰でもが自由に移動できるバリアフリーのハードな手立てと共に、障害者、人種、言葉、等における偏見や差別を無くすソフトなバリアフリーを無くすことも必要です。これは言い換えれば「心のバリアフリー」です。東京オリンピック・パラリンピック2020を契機に、誰でもが来訪しやすく、住みやすい街を創る。このために何が必要かを一緒に考えてみたいと思います。



連 健夫